

第22回県政知事懇談

湯崎英彦の宝さがし

テーマ【挑戦そして実現！引き出せ広島県の「底力」】

と き 平成23年1月15日（土）
ところ 廿日市市総合健康福祉センター
あいプラザ 1F 多目的ホール

広 島 県

目 次

頁

開 会	1
懇 談	2
自由討論	39
閉 会	48

開 会

(知事(湯崎))

皆さん、こんにちは。県政知事懇談「湯崎英彦の宝さがし」に御参加いただきましてありがとうございます。今日は懇談会のメンバーとして10人の皆さんに来ていただいております。お休みの方もいらっしゃると思いますけれども、貴重なお休みを割いてこの懇談会に参加いただきまして、本当にありがとうございます。

また、傍聴の皆様も、同じように今日お休みの方が多いと思うのですが、こうやって傍聴に来ていただきまして、本当にありがとうございます。

始まる前に少しこの会の趣旨を御説明させていただきたいと思います。

これは、今、私が23の市町、広島県内に市と町が23あるのですが、それぞれにお伺いしまして、直接住民の皆さんとお話をさせていただくという会としてやっております。

県の行政は比較的市や町といった行政と対応することが多く、住民の皆さんと直接いろいろなお話をする機会というのが少ないので、あえてこういう形で直接お話を伺っています。何か個別具体的な課題をそこで解決していこうというのではなく、いろいろな御意見を、それぞれの地域でどんなことを感じていらっしゃるのかを我々も感じていくということを目的にしております。

23あるものですから、全部やると二百何十人かの方に参加をいただくことになります。そういう御意見をためていくと、一つの行政の基盤のようなものができるのではないかと考えています。よくたとえて、味噌樽というふうに言っているのですが、味噌樽のように、あるいは漬物でもいいかもしれないのですが、ずっとためていって、発酵させるとおいしいお味噌ができると。そのお味噌を行政に役立てていきたいと思っている次第です。

そういうわけで、味噌樽にもいろいろな添加物を入れるとあまりおいしいものにならないので、普段思っている生のままのお話をお聞かせいただくのが一番だと思っております。

それと、もう一つ別の会で、市長、町長とお話をするという行政との対話もやっております。これで住民の皆さんの声、そして行政の皆さんの声、この両輪でやっていきたいと思っているその一環でございます。

これから最初90分ほどお一人ずつお話をいただきまして、大体1人5分ぐらいを目安にお話をいただくと90分ぐらいで終わります。残り30分あるのですが、残りの30分で、幾つかのテーマで、全員でお話をさせていただくというスタイルをとっております。ただ、この時間配分は目安でありますので、あまり気にしないで、1人5分ぐらいというのだけ少し気にしていただければと思っております。

懇 談

(知 事)

早速始めたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

最初は岡本さんから、よろしくお願いいたします。

あと、皆さんお飲み物を持っていただいていますけれども、御自由に飲みながら御参加ください。私もときどき水をいただきますので、よろしくお願いいたします。

(岡 本)

よろしくお願いいたします。佐方から来ました岡本と申します。私は 2005 年まで保育士をしていたのですけれども、本当に小さなころから絵が大好きで、ずっと続けてきて、公募展等に出していたのですけれども、そういう絵をもっと自分のものにしたいと思って、娘たちが自立したのをきっかけに、絵を中心とした生活のペースに変えました。自分も 28 年ほど保育士をしてきたので、そのことも生かしながらということで、子どものアトリエと、今、子育て支援というふうな大それたものではないですけれども、お母さんの時間をつくりながら一時預かりのようなことをして、今年で 7 年目に入りました。

また、保育士をしていたときに、私は絵が大好きなので、子どもたちと絵の時間はすごく楽しい時間だったのですけれども、ほかの先生たちの中には、どう書かせていいのか分からないとか、苦痛を感じている先生もいたので、私にできる手伝いと思い、美術教育とまではいきませんが、楽しい絵を描く手段を先生たちに伝えたり、子どもたちに楽しい時間をとってボランティアとしてやっているのが現状です。

(知 事)

ありがとうございます。28 年間保育士をされていらっしゃる。

(岡 本)

そうです。

(知 事)

地元で、ですか。

(岡 本)

そうです。今、合併しましたけれども、旧大野町の時代が保育士の時代でした。

(知 事)

保育士として御覧になって、二十何年前の子育てと、最近の子育てというのは、どうでしょうか。変わってきていますか。

(岡 本)

私たちが自分の子育てをしながら、保育士としてもやりながらというときは、おじいちゃん、おばあちゃんたちにすごく助けてもらいながら、子育てもしながら、保育士もしながら、共働きという言葉ですけれども、そういうことをしてきましたが、今のお母さんたちは転勤族だったり、核家族だったりして、ちょっと離れた私たちのような年代の人に聞くことが、ちょっと聞けば何でもないことなのに、そういうことを教えてもらう場がないというのが違うなと一番思います。

だから、一番近い例でいいますと、9月に出産をしたお母さんがいるのですけれども、お産が本当に間近に迫ったとき、実家の親は皆さんまだ働いているので、生まれたらこっちに来てくれるけれども、それまでの瞬間の大変なときには頼るところがない。ですからカフェに来て、いつの時間にこうなるから、子どもたちにもし何かあったら迎えに行つて欲しいとか、そういう段取りをして、誰かがいるから大丈夫だから携帯に電話してとか、そういうつながりをつくられたのです。カフェという言葉と合うかどうか分かりませんが、おしゃべりに来て、合間の時間にそういうつながりをつくる。カフェがそのような形で利用されているんだというのがよく分かるのです。そういうところが違うのではないかと思います。

(知 事)

なるほどね。昔だったら、家族だとか、あるいは場合によっては近所の人とか。

(岡 本)

おってあげるよ。見とってあげるからね。というような時間があつたらうけれども、私たちは、金銭的なことだけでなく、そういう安心も含めて、見てあげるのを金銭で割り切つてしてあげているというのも大事な仕事だねというふうに話をしています。

(知 事)

そうですね。やっぱり最近のお母さんたちが孤立しがちというか、精神的に追いつめられていて、今、虐待の問題とかもあります。そこにつながる要因でもあつたりするのではないかとされていますけれども、実感としてもそういうことがあるということでしょうか。

(岡 本)

そうですね。身近にちょっと聞く人が、行政に聞くと大げさになる感じがするんだけど、近所のおばあちゃんにちょっと聞いて、どうしたらいいというような、そういうことが大事かなと思います。

(知 事)

そうですね。今、県でも、例えばショッピングセンター等で、ちょっと買い物ついでに相談ができるような事業等、そういうことも進めています。

今年度は秋にオレンジリボン、虐待防止のキャンペーンをやったのですが、そのときもみんなで子育て中のお母さんに声をかけてあげましょうと。「こんにちは」だけでも、「かわいいですね」だけでもいいのですが、そうやって何かつながりを持っていることによって、ちょっと精神的に楽になっていく、そういうことも進めています。

去年、私も育休をとってちょっと話題になりましたが、お父さんが一番身近にいますから、そのお父さんがお母さんを助けてあげることは、そういう意味で、すごく大事なことだと思います。

(岡 本)

そういう意味では、すごく助けられるお父さんたちが増えたと思います。当たり前のように連れて来られたり、お迎えに来られたり、いつ何時に飲みましたよというのを言われるようになられたと思います。

(知 事)

そうですね。もっともっとそういうことを広げていかないといけない。社会全体で子育てをしていかないといけないと思っています。ありがとうございます。

さっき縁側サロンというところにお邪魔をしたのですが、ひょっとしてその途中にありましたか。

(岡 本)

そうかもしれません。

(知 事)

ですよね。看板があったような。

(岡 本)

そうです。それです。

(知 事)

結構住宅地の中ですね。

(岡 本)

そうですね。ど真ん中です。知っている方は知っているという感じで来てくださっています。

(知 事)

どうもありがとうございました。

それでは川田さん、お願いいたします。

(川 田)

川田です。よろしくお願ひします。先ほどは子どもたちと長巻きをしていただきまして、ありがとうございました。子どもたちは知事さんと無事成功したので、とても喜んでおりました。よろしく伝えてほしいとのことでした。

(知 事)

ありがとうございました。ちなみに、傍聴の方に御説明をしますと、川田さんはビッグ・フィールド大野隊という活動をされていまして、今日はその中のまきまきクラブというので、巻き寿司をつくりました。今日は私が就任して413日目なので、413cm、4m13cmの長い巻き寿司を子どもたちとみんなで一緒につくるというのをやっていたら、見事きれいにできました。

(川 田)

ありがとうございました。子どもたちは大喜びしておりました。

私の活動は、先ほど見ていただいたビッグ・フィールド大野隊の活動支援とかをさせていただいているのですが、その母体になります大野子ども体験活動・ボランティア活動支援センター、大変長い名前なのですが、これを立ち上げました。

このいきさつとしましては、立ち上げるときに、当時の旧大野町での社会教育委員が中心となって、私もその一人なのですが、やはり地域の課題をどのように解決していくか。そのために、まちづくりは人づくり、子どもが輝くまちづくりということで、子どもをテーマにすれば、みんなの心が一つになるのではないかという思いの中で、そういう啓発事業をさせていただきました。

もともと大野町というところは、廿日市もですが、本当に子どもたちに優しいまちだったので、意気投合しまして、皆さんが力をあわせてセンターを開所することができました。

一発の花火だけじゃなくて、大会での気づきを具体的なメニューとしてこなしていけるということで、それがかえってみんなの力を結集できたのではないかと感じております。

先ほど見ていただいた子どもたちはもちろんなのですが、その子どもたちを見守るときに、えてして大人がお膳立てをした中で子どもをお客様にしている活動が多すぎると私たちの中で課題が出ましたので、それでは、子どもたちを絶対お客様にしないで、事前の準備から当日の活動もですが、後片づけ、床掃除からトイレ掃除まで、すべて子どもが行って、公共の場所もきちんとしてお返しする。それが当たり前のマナーではないかということで、そういったことをさせよう。失敗を大いにさせる。うまくさせるだけじゃなくて、失敗することで知恵をいただき、また頑張る力も出るだろうと。そういうふうなことで始めました。

当初、支援センターのほうでプログラムをつくっていたのですが、子どもたち自身ももっと自分たちでやりたい。もっと自分たちを信じてほしいということで、ビッグ・フィールド大野隊というのができあがりまして、当初予想もしないうれしい誤算だったわけですが、その中で逆に私たちが元気をいただいているという形です。

先ほどもありましたが、やはり子どもたち、あと 10 年すれば親になるときに、忍耐力とか、他者への思いやりとか、我慢とか、道徳心、そういったことをきちんと身に付けさせるためには、私たち地域の大人も本気で叱ってやるべきだし、頑張ったときには本気でほめてやりたい。そういうふうなことで、本気で向き合うことを一つのテーマに掲げて取り組ませていただいております。

そういった中での活動で、今日は励ましていただいたので、子どもたちもとても励みになりましたし、何より大人も頑張れるような思いがしております。

(知 事)

ありがとうございました。このビッグ・フィールド大野隊というのは、子どもたちが発案して、結成されたということなのですか。

(川 田)

はい。先ほどもありましたように、自己資金とかも、一切の補助金なしで、お漬物を 1 袋 100 円で売りながら、イベントで焼きそばをつくり。

(知 事)

子どもたちが自分で考えて。

(川 田)

はい。全部子どもたちが、それで売ります。先ほどお願いした賛助会員になっていただ

いたりとか。

(知 事)

はい。

(川 田)

賛助会員は、心と心をつなぐための通信費として、お手紙を差し上げたり、それと行事カレンダー、先ほどちょっと見ていただいたと思うのですが、地域の学校と地域で子どもたちを育てくださる様々な情報を全部子どもたちが集約いたしまして、それを発信し直して、それを保護者や地域の方に活用していただく。四つの学校でも活用していただくということで、大変重宝がっていただけているというか、自分たちもそういうお役に立てているということで自信にもつながっているように感じております。

(知 事)

この美化びかクラブというのは宮島口ロータリーの清掃ですか。

(川 田)

はい。

(知 事)

いろいろな活動がありますね。これも全部子どもたちが考えて、これをやろうというのも子どもたちが決めてやっているのですか。

(川 田)

はい。毎年年間事業を決めまして、それを主に決めるのが企画調整会議という、中学生が主に会議に臨みます。

(知 事)

すごいですね。中学生が企画調整会議ですか。

(川 田)

そうです。それを持って、その次の週に連絡調整会議というので全員を集めて、私のところのクラブはこのように動きますので、何時にお弁当を持って集合してくださいという形です。

(知 事)

すごいですね。今日の巻きものも、20人ぐらいですか。

(川 田)

今日は20名ぐらいが。

(知 事)

20人ぐらいが並んで、長机を並べて、巻きもの後ろに材料を用意して、こっちで海苔を巻くのですけれども、号令一下、みんなきびきびと動くのですよ。あれも子どもたちが自分でやっているのですか。

(川 田)

はい。何度も失敗して、海苔も、ロールで巻くのも、いろいろなところで、インターネットで調べたり、よその長巻きをしているイベント会場があると聞けば、そこに何人かが派遣で行って調べたりとか、年間80万円ぐらいの予算を全部子どもたちが捻出して、一切自分たちで、その代わり、資料にお付けしたように総会も全部子どもたちで開いて、1円まで狂いがなければ見ていただいて、監査は大人にさせていただいて、その上で活動にあてています。

(知 事)

なるほどね。子どもたち、中学生と小学生、数的にいうと小学生のほうが多かったかなという気がしましたがけれども、小学生、中学生でもそれだけできるということなのですね。大人があればぴしっとやっている、ちょっと表現は悪いかもしれないですけども軍隊みたいな、回れ右といえば回れ右するような感じの、統制のとれた、そういう長い巻きものはそうでないとできないのですけれども、子どもたちも自分たちに任されればそういうふうになんとできるということですね。

(川 田)

そう思います。

(知 事)

それを我々の思い込みで子どもだからできないと思って、教えなきゃいけないとか、今のお金の面にしてもそうだと思うのですけれども、本当はやらせてみたらできると。

(川 田)

はい。子どものほうがすごく素直でよく頑張るので、反対に私たちのほうが教えられています。

(知 事)

そうですね。会長さんの挨拶も立派でしたしね。

(川 田)

ありがとうございます。

(知 事)

いろいろ今日は勉強になりました。ありがとうございます。

(川 田)

本当に子どもたちも励みになりました。ありがとうございます。

(知 事)

ありがとうございました。

それでは、野村さん、お願いいたします。

(野 村)

宮島から参りました野村と申します。よろしくお願ひします。私は宮島で「おひさまパン工房」というパン屋で、パンを通じた絆づくりというのをしております。

よく聞かれるのですけれども、なぜ宮島でやっているのかと。絆づくりをするのに、人が多いとか、人の流動が激し過ぎるところだと、なかなか1対1の触れ合いとか、密にならない。私はもともと広島五日市の出身なのですけれども、もちろん宮島とは縁もゆかりもないのですが、いろいろ県内を見渡したときに、宮島は離れ島であることと、それから人が少ない。少ないというよりも減り続けている。そういう意味で、人も顔も見えるかなり限定的なところだなと思ったので、普通はそういうところに行かないのですけれども、そういうところに着目して、宮島で絆づくりができるのではないかと、まず選びました。

そこで、なぜパン屋なのかという部分では、このパン屋を始めるに当たって、半年ほど宮島に、廿日市にも住んでいまして、廿日市からずっと半年ほど通って、いろいろな方に、道行く人にどんなことに困っていますかとお聞きしました。公民館で一緒に料理をつくったり、土鈴をつくったり、場合によっては風呂敷包みの献立とかも練ったりして、聞くと、お年寄りが非常に多いので、料理が、火のそばに立ちたくないとか、重たい買い物をした

くないとか、一人暮らしをしているので二人前、三人前の買い物をしたくないとか、つくっても余って捨てるとか、そんな方がたくさんいらっしゃって、そういう中で、パンだったら料理しなくていいとか、柔らかいとか、買い物をしても軽いとか、雨の日でもそれだったら買いに行ってもいいという方がいらっしゃって、だったらパン屋をやってみようかと。僕はパンをつくれなかったので、パンはそこから勉強しに行ったのですけれども、技術だけを付けて戻ってきて、そういう中で、名前を出してもいいのですけれども、宮島のやまだ屋さんの社長さんと。

(知 事)

中村社長さんですか。

(野 村)

中村社長さんとひよんなきっかけでお会いさせていただいて、そのときにそういういろいろな思いでやるのだったら、今、使っていない製館工場があるから、そこをよかったらパン工場にしたらということで申し出ていただいて、それで工場をパン工房として変えさせていただいて、そのパン工房をつくっている途中にも、石釜、廿日市は木のまち廿日市で有名だそうなので、やっぱり木を使ってパンをつくりたいなと思って石釜をつくったり、その石釜も宮島のあるおじいちゃんが、よかったら石を持っていけよということで譲っていただいたり、そういう感じで実際パンを焼き始めると、宮島ではしゃもじが特産物で、端材がたくさん出るので、それも有料で産業廃棄物で捨てていたそうなのですけれども、そのおじいちゃんがよかったら使って燃やしてくれたほうがお金を使わなくて済むということで、いま現在もずっと継続していただいています。

そういうことで、いろいろ、人助けじゃないのですけれども、やってみようとしているうちに、どんどんいろいろな支援者の方が集まってくださって、大聖院の方が消えずの火もよかったら使って、それを種火にしてパンを焼いてみたらということで、石釜も火入れ式をしていただいたり、展示もしているのですけれども、実際、毎朝、消えずの火でしゃもじの端材を燃やしてパンを焼いている状況です。ちょっと作り話ばいのですけれども、本当にそういうことでどんどん支援してくださる方があらわれて、いま現在に至っています。

(知 事)

気がつくど、循環型社会をつくりだしているような感じですね。製館工場もリサイクルして、石もリサイクルして、端材もリサイクルして、消えずの火もリサイクルして。

(野 村)

そうですね。石釜でパンを焼いて、炭が出るのですけれども、それをおくどさん、かまどに移して、そこでお湯を沸かして、せいろを据えて蒸しパンをつくったり、あるいはベーグルというパンはゆでる工程があるのですけれども、それをゆでたり、最終的に余った灰は、最初は捨てようと思っていたのですけれども、宮島には結構畑をされている方がいらっしやって、店の前に置いておくと持って帰ってくださって。

(知 事)

そうですか。それでまた新しい野菜とか。

(野 村)

そういうのができたら理想なのですけれども、まだそれは時間がかかるかなと思っています。

(知 事)

もともとはパンをやられていたわけではなくて、ただ宮島に関心があったのですか。

(野 村)

今はパンのつくり方に話が及んでしまったのですけれども、もともとはそういう地域に困っている方がいらっしやるので、どうにかお役立ちできないかと思って始めたことなのです。実際始めてみて、私のお客様のほとんど、9割以上は地元の方で、その中でもおばあちゃんが、パンは女性が買うほうが多いので、おばあちゃんたちが来てくださっていて、どこが絆づくりかと言うと困るのですけれども、例えばパンを買ってもらいながら、実は毎週のようにお野菜を届けてくださったり、パン屋は非常に小銭がいるのですけれども、小銭に困っていると言えば、家から1円玉、5円玉、10円玉をばさっと持ってきてくださって、幾らあるからじゃなくて、数えてそのお金を1,000円札か500円に換えて、それをまた届けてくれればいいのか、そういう触れ合いを日々しているのです。最終的には例えば僕のパン屋がなくなったときに、やめたいとか、やめるときに、誰か代わってやろうとか、うちの孫に継がせようとか、そういった方があらわれたとしたら、僕の絆づくりは一つの成果ではないかと考えています。

(知 事)

大変失礼ですけれども、その前はどのようなお仕事をされていたのですか。

(野 村)

広島の商品の会社にいたのですけれども、そこではもちろん営業から始まりまして、海

外事業部に行きまして、それから商品開発をしながらいろいろやっていたのですけれども。

(知 事)

サラリーマンだったのですか。

(野 村)

はい。サラリーマンをやっていました。

(知 事)

それがなぜ、宮島で困っている方と。困っている方というのがどなたか具体的にいらっしやったのですか。お知り合いの方とか。

(野 村)

いや、宮島には誰も知り合いがいなくて、高校の同級生ぐらいはいたのですけれども、全く遊んだりするようなタイプではなかったのです。

(知 事)

そういうふうに思われるようになったというか、思って実行されるようになったきっかけというのは何だったのですか。

(野 村)

きっかけは、もちろんサラリーマン時代にいろいろな勉強会とかに顔を出している中で、本当にいい出会いがあって、これは皆さんの発表の中にもあったのですけれども、僕は勝手に絆づくりと呼んでいるのですけれども、商売をするにしても、何か地域に貢献する活動にしても、やっぱり絆というのがすごく大事なもので、今は非常に商売というか、流通がすごく発達して、大量消費社会になって、顔も見ずにどんどん売って、なかなか商品をつくっても「ありがとう」と言ってもらえる社会でなかったり、つくる人も顔が見えない。買う人も顔が見えないという状態で、お互いに満足感が得られていないのではないかと、思って、そこで、まずは一番小さな社会から始めてみるのはどうかなということをとある勉強会で気づかされて、実際に動いたのは私だけだったのですけれども、今、苦勞しているからどうなのかなとは思っていますけれども。

(知 事)

確かに勉強会でそういうことを話したりすることはよくあるかもしれませんが、それを行動に移すというのは実はなかなか大変なことだと思います。でも、行動すれば、

物事は動いていくということだと思いますけれども。

(野 村)

まさにおっしゃるとおりです。

(知 事)

貴重なお話をいただきましてありがとうございます。

(野 村)

ありがとうございます。

(知 事)

それでは、富野さん、お願いします。

(富 野)

よろしく申し上げます。廿日市市吉和から来ました富野勉です。自分は親の影響で、観光農園とか、よく連れていってもらった影響で、小学校のときから農業がしたくて、大学で園芸学部とか、岡山県や鹿児島県の農業法人で働きながら修行を積んで、30歳になった区切りに県のほうに相談に行ったら、吉和を紹介してもらったので、それで吉和に行くことになりました。吉和ではハウレンソウで独立することを目指して、今、勉強中なのですが、イネの勉強もしたり、農業技術大学校で勉強したりもして、去年11月から自分のつくるところのハウスを建設しながら、雪のときは雪かきのアルバイトとかしながら、今はやっています。

吉和は高齢化などで後継者がいなくなってきていて、生産量も減っているのですが、何とか自分で頑張ってどんどん若い人を集めていきたいと思っています。

(知 事)

ありがとうございます。ちなみに、御家族、お父さん、お母さんが農業をされていたわけではないということですね。

(富 野)

そうです。

(知 事)

でも、観光農園がきっかけで農業をやりたいと思われたと。

(富 野)

物心がついたら、農業をやると思っていました。

(知 事)

そうですね。それでちゃんと計画を立てられて、大学も園芸学部に行って、さらには農業法人で修行をして、それで県内、広島に戻ってこられた。

(富 野)

はい。そうです。

(知 事)

ずっとプランされてきたのですね。

(富 野)

はい。30歳を区切りでやりたいと思っていたので。

(知 事)

なるほど。今、本当に広島県の農業というのが大きな課題に直面しているというのは実感されていると思うのですけれども、特に、今おっしゃったように担い手がどんどん減っていて、担い手という言葉は我々の世界だと何種類かに使うのでややこしいのですけれども、要するに、働く人が高齢化していますよね。同時に、そういう農事組合法人などでも、なかなか外から来た若い人を雇ってくれないというのもあると思うのですけれども、そういう経験をされましたか。

(富 野)

雇ってはもらえたので。

(知 事)

直接吉和を紹介されて、吉和に行かれたから、それは大丈夫だったということですか。

(富 野)

はい。ただ、入ってきても長続きしないという人が多かったですね。

(知 事)

なるほど。そこはどのような理由なのでしょう。

(富野)

重労働というのと、自分の理想と違ったというのが多かったです。

(知事)

やっぱり思っていたよりもきついと。

(富野)

はい。きついですね。

(知事)

理想と違うというのは、どんなところだったのでしょうか。

(富野)

スローライフみたいな。

(知事)

スローライフをしたいと思ったけど、えらくきついし、忙しいと。

(富野)

そうです。

(知事)

なるほどね。都会人が思い描く田舎のゆったりとした暮らしみたいなのはほど遠いということなのですね。実際、忙しいですか。

(富野)

忙しいけれども、やりがいがあるので、そこまで感じなかったです。

(知事)

でも、何にしても生計を立てていこうと思ったら、のんびり、ゆったりして生計はなかなか立たないですよ。何をやってもね。苦労があるから経済的にも報酬があるわけであってね。

(富 野)

はい。

(知 事)

そうですね。若い富野さんのような方に農業に参入してもらおうというのは本当にすごく重要なことだと思っているのですけれども、もっと増やすにはどうしたらいいか、御意見はありますか。

(富 野)

それほどの思いがある人ならやってくれると思うのですけれども、経済的な面もきっとありますね。忙しい割にはあまりもらえなかったり。

(知 事)

やっぱり、きつさと給料が合っていないという感じですか。

(富 野)

はい。

(知 事)

でも、きっと思いがあれば、それは続けられると。

(富 野)

はい。

(知 事)

去年の終わりに広島県の農業の基本計画をつくったのです。「広島県農林水産業チャレンジプラン」というものなのですけれども、これから産業として自立できる農業をどうつくるかということで、たくさん課題があるのですけれども、そこで目指しているのは、やっぱりそれぞれの営農されている方、農業に携わられている方に一定以上の所得がきちんと入るように、そのために農地を集積したりとか、あるいは付加価値の高い作物をつくっていくとか、ハウレンソウとかはそういうものだと思うのですけれども、そういうことを進めていまして、そのための人材育成や、集積のための支援のようなことはやっていこうとしているのです。大変期待しておりますので、是非引き続き頑張ってくださいと思います。

(富 野)

はい。頑張ります。

(知 事)

ありがとうございます。

(富 野)

ありがとうございました。

(知 事)

それでは、中島さん、お願いします。

(中 島)

同じく私も廿日市市吉和から参りました中島彩と申します。私は広島生まれではなくて、兵庫県の神戸市出身です。現在、有限会社安田林業という林業会社に勤務しております。

今日も実は作業着で来たいぐらいだったのですけれども、普段は現場に出て、実際にチェーンソーとか、現場作業を行っております。

(知 事)

農と林ですね。

(中 島)

そうですね。その現場作業を行うのと並行して、施業プランを作成するというのを今、勉強しております。その山々にあった 50 年先、100 年先の山をどうしていきたいか、どういうプランを立てていくかということを実際山を歩いて勉強して、持続可能な山づくり、林業をどうしていきたいかということをお勉強しております。以上です。

(知 事)

ありがとうございます。農業に参入する若い人も少ないのですけれども、林業に参入する若い人はもっと少ないですよ。

(中 島)

そうですね。少ないでしょうね。

(知 事)

どうですか。仲間は何人かいますか。安田さんだけに限らず。

(中 島)

広島県で今、私が知っている限り、女性の現場作業員が私を含めて3名います。

(知 事)

女性が3名ですか。

(中 島)

はい。うちの会社もあとは男性の作業員なので、もちろん女性は1人なのですけれども。でも、一緒の広島県でそうやって現場で働いている子たちがいるというのは、すごく励みで、今も情報交換とか、連絡のやりとりはしています。

(知 事)

その方は地域的にはどこにいらっしゃるのですか。

(中 島)

北広島町のほうだとか、大朝のほうだとか。

(知 事)

では、比較的近いですね。

(中 島)

そうですね。1時間ちょっとで行けます。

(知 事)

まさに林業ですから、伐採して出すところまでを主にやっていらっしゃるのでしょうか。

(中 島)

そうです。今は搬出間伐という班にいますので、実際伐って、造材をしてトラックに積み込んでというところまでがうちの班の仕事です。

(知 事)

林業というのは、最低2世代、3世代かけないと、その3世代分の計画でやらないと回っていかない産業ですよ。

(中 島)

そうですね。

(知 事)

今ちょうど3世代目ぐらいで、ちょうど戦後に植えた木がだんだん伐れる時期になってきていると思うのですけれども、これからの林業を見て、若い人に同じようにかかわってもらいようにするためには、どういったことが必要だと思われませんか。

(中 島)

難しいところですが、実は富野さんと一緒のことを思うのですけれども、私は正直ウエルカム林業というか、どんどん林業に来てくださいという考えはあまり持っていないで、やっぱり厳しい仕事なのです。朝早くから夜遅くまでの現場作業で、確かに給料面に関しても決して高い仕事ではない。でも、どうして続くかという、自分のつくりたい山があって、こうしていきたいという夢があるので続くのです。そういう自分の信念というか、こうしていきたいというものがないと、続けられる仕事ではないと思うのです。そこを明確にすれば、もちろん女性でも不可能でない仕事だと自分で実感していますので、そういう方たちにはオープンに入ってきていただきたいと思っています。

(知 事)

みんなそれぞれ仕事に夢を感じたりとか、こういうことをやりたい、ああいうことをやりたいというのはあると思いますが、今、特に農業についてはまだいろいろ関心を持ってくれる人たちが増えていて、実際はスローライフ的に思っていて、大違いだったといったことが多いのかもしれませんが、林業の場合には、まだそこまで広がりをもたないので、これから、どうして楽しいのか、どんなことが楽しいのかということをもっと広げて、それこそ中島さんのような方にPRしていただくことが大事かもしれないですね。

(中 島)

はい。今、ようやく3年目を過ぎまして、ちょっと余裕ができてきたというか、周りを見られるようになってきて、今後していきたいこととして、小学校なり幼稚園の子たちに実際に山で林業を体験してもらおう。今でも正直林業は自然破壊という人は少ないのです。木を伐って悪い人たちというふうに。でも、そうじゃないんだよと。山はちゃんと手入れをしていかないと育たないということを伝えていきたいので、そういう中で子どもたちに実際に山に入ってもらって、感じてもらえる林業、そういうことができたらなという希望があります。

(知 事)

なるほど。中島さんも神戸で、お伺いをすると、前の職業は全然違う職業をやられていたのですよね。

(中 島)

はい。全然違う仕事です。

(知 事)

興味を持たれたきっかけは何だったのですか。

(中 島)

私は、実は小学生のときなのですから。

(知 事)

やっぱり小学生なのですか。

(中 島)

はい。小学生のときに。

(知 事)

でも、いったんは違う職業をされて。

(中 島)

そうですね。夢が二つあって、一つの夢を叶えたというか、25歳まではそっちに専念して、それから山に入ろうと。で、25歳を機に林業に転職しました。

(知 事)

小学生のときにはどういう。

(中 島)

神戸市といっても六甲山のふもとで、結構山の中で育ちまして、兄がいたので、山と一緒に遊ぶことが多くて、でも、ある日、住宅地ができるというので、目の前でダイナマイトで山を爆発させる瞬間を見たのです。もちろん遠くだったのですけれども、自分の遊び場だったところがなくなる瞬間はすごく衝撃で、将来私は大人になったら自分の遊び場を

取り戻すと。そういうすごく自分勝手な夢だったのですけれども。

(知 事)

山を守りたいという，そういう意識だったのですね。木を伐りたいじゃなくて。

(中 島)

はい。山を取り戻したいと，それが根本にあって，今の林業に結び付いています。

(知 事)

きっと現実にはスローライフとはほど遠いでしょうけれども。

(中 島)

そうですね。本当に忙しい毎日です。

(知 事)

ありがとうございます。頑張ってくださいね。

(中 島)

ありがとうございます。

(知 事)

農業も若い人に参加してもらうのが課題ですが，林業も漁業もそうなのですけれども，廿日市は実は農林漁業全部やっているのです。漁業も，カキのように栽培漁業と，普通の漁業も盛んですけれども，皆さん後継者にすごく苦勞されている。そういう意味でも本当に頑張っていたきたいと思います。ありがとうございます。よろしくお願ひします。

それでは，尾形さん，お願ひいたします。

(尾 形)

宮島クリニックの院長をしている尾形といいます。私は広島出身で，広島で育って，大学を出て，広島大学第一外科というところで消化器外科を専門に研修をしたのですけれども，もともとは広島五日市の石内というところの出身で，田んぼがあって，そこに将来自分のクリニックを開くというのを目標にやってきたのですけれども，たまたま前の院長の知り合いの知り合いを通じて，前の院長がやめるときに声がかかって，どうせ開業するなら，その前にうちにこないかという誘いがあって，今の宮島クリニックに4年前に赴任しました。

宮島クリニックについてなのですが、島に1軒の診療所で、公設民営というか、建物とか医療器具は廿日市市のもので、私はそれを借りて経営させてもらっています。内科、外科、そういうことを標榜してやっているのですけれども、島に1軒ですので、小さなお子さんから専門外の整形とか、皮膚科とか、場合によっては目の奥のほうのコンタクトレンズをとったりとか、やれることをいろいろやっています。ほかにも地域医療ということで、産業医、学校医、あと予防接種とか、健診への参加、宮島でトライアスロンがあったら医療班ということで、宮島の地域医療を一人でやっている状態です。

いろいろな患者さんが来るので、非常に充実した生活をさせてもらっています。今日も一番小さいお子さんは1歳のお子さんと、風邪で来られた赤ちゃんと、インフルエンザの予防接種で、二日前にインフルエンザの警報が出たということで、それを聞いてあわてて来られた方がいて、一番高齢な方は100歳の寝たきりのおばあちゃんなのですけれども、家族の方が、最近ちょっとうちのおばあちゃん、御飯を食べんよねという相談を受けたりして、100歳じゃけ、しょうがないねというようなことで、自分の知識の範囲内で患者さんを幅広く診るようにしています。

(知 事)

ありがとうございます。尾形さんも野村さんと同じように宮島の人じゃなかったけれども、宮島で働かれるようになって、クリニックも宮島なのですけれども、御自宅も宮島なのですか。

(尾 形)

4年前に開院したときには、2階が住居になっていますので住んでいたのですけれども、夜間救急があまりにも大変で、今は広島市内のほうに住んで、通ったり泊まったりして、修学旅行の多いシーズンは体力のもつ限り泊まったりもしていますし、患者さんの様態が悪いときとかはもちろん泊まり込んでいるのですけれども、毎日住んでいると、昼も夜も、土曜も日曜もひっきりなしにやって来られて、これはちょっと倒れるか、やめるかになってしまったので、意を決して島外に出て、可能な限り夜間も診るという体制でやっています。

(知 事)

なるほど。もともとは石内に診療所をつくられたいというところだったのに、宮島に行かれようと思ったのはどうしてでしょうか。

(尾 形)

それは島に1軒ということで、自分の能力を生かせるのではないかと。大きくできるの

ではないかということで、実際、開業して知らなかったこととか、いろいろなことで勉強したり、経験したり、まさに今日のような機会に参加できることもそうだと思うのですけれども、その点に魅力を感じたので赴任しました。

(知 事)

なるほど。今は御存じのとおり地域医療というのは大変大きな課題があり、宮島はあまり離島というイメージではないのですが、それでも実際には船で渡らなければいけませんからいろいろな制約があります。私も不勉強で診療所が1軒しかないというのは知らなかったのですけれども、もしなければ島民の皆さんは大変な思いをされるところだろうと思います。

尾形さんのように途中からそういうふうに総合診療で地域医療に取り組みたいと考えていただくというのはすごくありがたいことだと思います。今、県では広島大学の医学部定員に地域枠というものを増やしてもらって、学生のと時から地域医療に関心のある人に来てもらう、そういうふうにして増員配置を進めようと一生懸命頑張っているところですが、そういう関心を持っていらっしゃるお医者さんは結構いらっしゃるものですか。

(尾 形)

テレビとかの影響で派手な手術だとか、ああいったのに人気が集まったり、一方で過酷な労働を避けて時間外とか当直内科とか、そういったのが人気が出ているという面もあるのですけれども、僕自身、地域医療をやってみて大変おもしろいので、そういったことをちゃんと教えていけば、自然に興味を持つ人は増えてくるのではないかと思います。実際にそれを教えてもらったか、あるいは卒業するまでにそれを経験したかと言われると、そういうことは全くなかったもので、そういったことを学生さんに教える機会があれば、まだまだ広島で地域医療をという方が増えるのではないかと思いますし、あと、広島大学は出身者の割合がかなり多いので、卒業したらすぐ地元の県に帰るという方は意外と少なく、広島での過疎化、地域医療を担う医師というのはポテンシャルが結構あるのではないかと僕は思いますので、教育というか、医学部でのそういうカリキュラムがあれば、一つの手になるのではないかと思います。

(知 事)

ありがとうございます。地域医療に携わっていらっしゃるお医者さんというのは、実際にやってみると、おもしろいというふうにおっしゃる方が多いですね。そのおもしろいポイントというのは、どういうところなのでしょう。

(尾 形)

宮島の場合は特に、ほとんど皆さんの顔も、名前も、性格も、あるいは家族内の人間関係まで、4年いけば大分分かってきて。

(知 事)

病院にいと、さらけ出たりしますからね。

(尾 形)

顔色を見ただけで今日はおかしいなと分かります。医者の仕事じゃないのですけれども、そういった家族内の話をしているうちに、精神的に落ち着いて不眠症が治ったりとか、そういった患者と共有できるというか、僕自身、外科で勤務医だったときは、入院される、手術する、治る、退院するということだと、ほとんど人とのつき合いというのはなかったのですけれども、今はもう別れたくても別れられんぐらい地元の方と密接に、けんかしても次もまた診ないといけないという感じですので、そこら辺の深い人間づき合いというのは楽しいですね。

(知 事)

本当に人とのつながりが濃いものであるということですね。分かりました。どうもありがとうございます。尾形さんも大変貴重なお医者様として活躍していただいておりますので、引き続きよろしくお願いします。

(尾 形)

ありがとうございます。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、生川さん、お願いいたします。

(生 川)

先ほどは参加していただいてありがとうございました。いかがでしたでしょうか。

(知 事)

ありがとうございました。何というか、皆さん、元気ですよ。楽しそうで。

(生 川)

はい。最高齢が幾つぐらいと思われませんか。

(知 事)

幾つぐらいでしょうか。95 歳ぐらいですか。

(生 川)

はい。96 歳がお二人いらっしゃいまして、95 歳がお一人いらっしゃいました。

今日来ていただいた縁側サロンは、平成 12 年に介護保険が始まると同時に開催しました。民生委員だったものですから、お一人暮らしの方を訪問すると、一人暮らしの方が寂しいのよ、寂しいのよとおっしゃるのです。テレビとけんかするんよと。電話がかかってくるけども、1 週間ぐらいしゃべらなかつたら、すっと言葉が出ないのよとおっしゃるのです。この寂しさを少しでもなくしていけたらいいなと思って、ちょうどそのころ民生委員の研修会でサロンづくりをなささいというお話が出ていて、いいところに 1 周忌が済まれた空き家があったのです。東京に娘さんがいらっしゃって、生川さん、サロンしたいって言っていたよねと。そうですと言ったら、この家を使いなさいと言ってくださって、今日の家ではなくて、それよりも 100m ぐらい上に上がった家だったのですが、その家の縁側が 10 畳ぐらいあったので、それで縁側サロンと名付けたのと、人と人の縁をつなげる場所であってほしいなという思いがあったので、縁側サロンと名付けたのです。

希望としては、高齢者と若い方がそこで集いができて、高齢者の知恵と若い人の元気がいただけるような場にならないかなと思って始めました。週 1 回開催しています。近所のボランティアの方に支えられて、11 年になります。今日が 513 回目でした。

私たちの目的は、誰でも受け入れる。高齢者だけとかではなくて、男性女性にかかわらず、どなたでもいらっしゃい。地域の人じゃなくても、今日もタクシーで阿品台から見えていた方もあります。五日市のほうからも見えています。ということで、あまり地域を限定しないようにしています。

今日は歌がありましたけれども、その後は、おしゃべりタイム。お茶とおしゃべりで、にぎやかです。みんなわいわいがやがやと楽しくされています。そこでお友達をつくって一緒に宮島に行ったり、一緒にフジへ行ったりという仲間づくりができてきたと思います。

今日は歌でしたけれども、廿日市市がされている出前講座というところから講師を派遣していただいたり、講師料無料ですので、廿日市の行政をたくさん使わせていただいております。

平成 21 年度までで 477 回開催し、1 万 8,052 人の方の参加をいただいております。私たちのサロンの特徴というのは、決まりがないのです。細かな決まりをつくっておりません。自由で、居心地がよかつたらいいかなと思っています。

ボランティアさんも楽しんでもらおうと思って、ボランティアさん自身が楽しむことにしています。そして、一人一人を緩やかな、細やかに見守っていこうということで、そば

から見守っております。そして、無理をしないということで、休みたいときはボランティアも休むし、無理をしないということが今まで長続きしてきたことかなと思っています。

来られていた方がおっしゃるには、お客さんじゃないよ。我が家のような雰囲気がいいんよと。そして、笑顔があふれること。出入りの自由さがあるから、あらかじめ申し込んだり、キャンセルしたりということがないのでいいよと。そういう形で私たちは続けております。以上です。

(知 事)

ありがとうございます。今日は50人ぐらいいらっしゃっていたと思うのですが、あれだけたくさんお集まりになると、けんかが起こったりはしないですか。

(生 川)

あります。実際には、あの人が来られるけ、来んというふうになった方もあります。

(知 事)

そうですね。ちょっとしたけんかみたいなのは、口げんかみたいな。

(生 川)

そこでのけんかではないのです。近所のトラブルから、あそこに行ったらあの人と顔を合わせるから行かないとかいうことはあります。

(知 事)

私が水を向けてしまったのは、ある意味でいうと、そういうお一人でいたら、さっきテレビとけんかとおっしゃっていましたが、けんかも一つの社会性の現れなわけです。けんかしたり、仲直りしたり、けんかしても患者さんを診なきやいけなかったり、それも絆の一つなので、そういうのも含めていろいろ交流があるのがいいのではないかと感じたのですけれども。

(生 川)

はい。けんかされても来ていらっしゃいます。席が離れたところに座っていらっしゃいます。

(知 事)

なるほどね。でも、毎回ああやってたくさんいらっしゃるのですか。

(生 川)

はい。今日は県知事さんが見えるということで特別多かったのですが、普通は 30 名から 40 名の間です。

(知 事)

でも、それだけ来られたら、結構あのスペースいっぱいになりますでしょう。

(生 川)

はい。いっぱいになります。今日が 48 名でした。

(知 事)

マージャンとかもやられるとか。

(生 川)

はい。金曜日はマージャンです。昨日ありました。

(知 事)

そうですか。マージャンもいいらしいですね。頭も使うし、手も使うので。

(生 川)

はい。男性が楽しみに来ていらっしゃいます。タクシーに乗ってこられますよ。透析を打ちながら、これが楽しみということで、透析でない日なので来られています。

(知 事)

それはそうですよね。透析をしていたって楽しいことはやっていきたいし、それが生きる力になりますよね。

(生 川)

はい。認知症の人にも来られているのですが、ときどき間違われてされるのですが、皆さんが許し合っていらっしゃいますので。

(知 事)

細かいことは言わんと、大らかにね。それでも腹が立ってけんかするかもしれないけれども。

(生 川)

1回ありました。

(知 事)

そうですか。でも、本当に皆さん生き生きとされていて、こういう感じでみんな過ごせたらいいなと私も感じました。

(生 川)

ありがとうございます。

(知 事)

また皆さんによろしくお伝えください。

(生 川)

伝えておきます。でも、今日は知事さんの幼稚園の写真が出ましたけれども。

(知 事)

そう、びっくりしました。これも皆さんに解説すると、私が通っていた保育所、五日市南小学校の隣にある南保育園というところなのですけれども、私は昭和 46 年にそこを卒園しているのですけれども、そのときの卒園写真を持っていらっしゃる方がいて、近所の方で、私の同級生のお母さんだったのですけれども、びっくりしました。

(生 川)

ありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございました。

それでは大前くん、お願いします。

(大 前)

廿日市市の玖島から来ました大前です。私が通っている佐伯高校は、創立 64 年で、生徒数は 115 人、3 クラス編成と小規模な高校なのですけれども、地域とのかかわりを大切にするを一番に考えて活動しています。

私たちが地域とかかわる上で参加している行事は、「みやじま国際パワートライアスロン」の応援や誘導の補助など、あとは校内・地域の清掃、花植えを行う花いっぱい清掃奉

仕活動という活動を行ったり、廿日市市社会福祉協議会主催の心と心のハーモニーフェスタに、今年はインタビューとクイズ、佐伯町のことをクイズにしたので、そのクイズを行うために参加しました。このような地域での活動に力を入れて参加しています。

花いっぱい清掃奉仕活動なのですけれども、通学で普段利用しているスクールロードとか、あとは地域の津田保育園の子どもたちが利用する公園、あとは津田にある広島電鉄のバスの車庫の清掃、あとは高齢者の方が利用されるせせらぎ園という介護施設の清掃や花植えなどを通して私たちの活動を見てもらって、佐伯高校のことをより知ってもらおうという活動をしています。

ボランティアとはちょっとかけ離れるのですけれども、佐伯高校では学習活動の一環で、地元の小中高6校が集まり、連携して行う公開研究授業を行っています。佐伯中学校に集まって、今年は佐伯高校は2年生が英語の授業を公開しました。

ほかにも部活動では、近隣の高校ではあまり見られない馬術部やアーチェリー部のすばらしい活動があります。世界大会やユースオリンピックに参加したり、それを目指して頑張っている先輩方がいるので、その姿は私たちに勇気を与えてくれます。先輩方がこれまでつくってこられた伝統をこれから後輩に受け継いで、伝統にしていってほしいと思います。

このように、佐伯高校では様々な行事に取り組んで頑張っています。将来私たちは地域に密着し、地域でともに生活する高校生として頑張っていきたいと思います。

そして、私自身の考えなのですが、佐伯高校をさらに盛り上げるためには、地域との連携を一層深めていくことが大切だと思っているので、これからもいろいろな活動を通して地域との連携を深めていきたいと思います。以上です。

(知 事)

ありがとうございました。そうやっていろいろな地域活動をしてもらっているのですけれども、逆に、高校生の側として、地域の皆さんが佐伯高校とはどういう関係を持ってきていますか。

(大 前)

佐伯高校で文化祭が行われたりするのですが、その文化祭に参加してくださったり、あとはその文化祭でバザーを3年生が開くのですけれども、そのバザーで販売された食品を食べていただいて。

(知 事)

地域の人が来てくれるのですね。

(大 前)

はい。おいしかったとか、そういうふうな感想をいただけるのが一番うれしいですね。

(知 事)

なるほど。地域にも貢献するし、地域からも貢献をしてもらっているという、そういう実感はありますか。

(大 前)

実感というほど伝わってくることはないのですが、地域で活動していることによって、通学中とかに地域の方に挨拶をすると、明るく挨拶を返してくれたり、やっぱり地域とかかわりが持てたんだなということがときどき実感できます。

(知 事)

そうですね。佐伯高校は3クラスなので、1学年1クラスということですね。

(大 前)

そういうことです。

(知 事)

小さな学校でいろいろ苦勞する面はあると思うのです。部活をするにしても、人数を集めるのは大変だとか。

(大 前)

そうですね。人数が少ない分、部活動に参加する人もあまりいなかったりとか、場合によっては、クラブの中に一人もいなくて、そのクラブが廃止になったりというのもあります。

(知 事)

学校の先生もいろいろな教科を、それぞれ1クラスごとしかないので、教えるのも大変だと思います。逆に、そういう地域とのつながりということを少し強く持てる、なかなかまち中の高校等で地域の人と高校生とが、お互いに「こんにちは」と挨拶をすることなどないですからね。そういうお互いを見合う関係が逆にできるのだらうと思うのです。

ちなみに、大前くんは出身も佐伯なのですか。

(大 前)

はい。佐伯中学校から受験して、佐伯高校に入りました。

(知 事)

そういう意味ではずっと佐伯にこれまでするのですけれども、これから大きくなって、大学あるいは就職のときに、広島に残りたいと思いますか。それとも外に行きたいと思っていますか。

(大 前)

率直な意見で言わせてもらおうと、あまり外のほうに行くのが得意ではないので、できるだけ広島県内で就職したり、活動したりしていきたいと思います。

(知 事)

外に行くのはあまり得意じゃないのですか。

(大 前)

はい。

(知 事)

あまり環境変化が好きではないということですか。

(大 前)

そうですね。そういうことになりますね。

(知 事)

生徒会長をされている割にはおとなしめな感じなのですね。では、広島がとってもいいという感じがするというわけではない。

(大 前)

いえ、そういうわけじゃなくて、広島もすごくいいところもありますし、すごく住みやすい環境なので、そういう意味では広島県にずっといたいと思います。

(知 事)

ちょっと言わせてみたいのですが、ありがとうございます。今、若い子が、特に二十歳前後で学校あるいは就職で広島県から出ていくということが非常に大きな問題になっています。これまであまり問題視されていなかったのですけれども、今、私が非常に課題である

と認識していることですので、年間約 2,500 人、広島県から出ていってしまうのです。2,500 人だけ出ていくのではないのですよ。何万人も出ていっていて、逆に広島県に入ってくる人もたくさんいるので、その差が約 2,500 人、赤字になっているのです。これは広島にもっと魅力があったら、もっといろいろなところから来てもらって、あるいは出ていかないで広島に残ってくれるということになります。もっともっと魅力を上げて、出ていく若い人たちを少しでも減らす。昔から出ていくほうが多く、特に進学で関西や東京に行ったりする人が多かったのですが、30 歳ぐらいになると帰ってきていたのです。これも同じ人が帰ってくるとは限らないのですけれども、別の人かもしれないけれども、その収支を見ると、30 歳ぐらいの年代での収支は黒字になっていて、トータルは黒だったのです。それが、最近はこちらで戻ってこなくて、出ていくだけになってしまっていることが本当の課題なのです。是非広島に残りたいと思うような広島県づくりをしようと思うのですけれども、大前くんには是非残ってもらって、将来を担っていただければ大変ありがたいと思います。

ちなみに、これまで 17 人高校生が参加してくれていまして、大前くんを入れて 10 対 7 で広島に残りたい人が多いということで、この会では赤字じゃなくて黒字ということで、ちょっとうれしく思っています。ありがとうございました。

(大 前)

ありがとうございました。

(知 事)

大前くんは、今 2 年生でしたか。3 年生。

(大 前)

今、2 年生です。

(知 事)

じゃあもう 1 年、頑張ってくださいね。

(大 前)

ありがとうございます。

(知 事)

それでは、木谷さん、お願いします。

(木 谷)

宮島口から来ました商店街のお世話をさせていただいております木谷と申します。よろしく申し上げます。

宮島口というのは、歴史的に言うと、明治30年に山陽鉄道ができて以来ということで、それまでは地御前が主だったのですけれども、そこから歴史が始まりました。

宮島口は宮島に行くための通りすがりだったので、それを何とかしたいというのが子どもときからあったのです。

大野町の時代でもいろいろな施策があり、アジア大会もやらせてもらったのですが、埋め立てができ、いよいよ宮島口を宮島の玄関口、木戸口にしようと張り切っています。本当は木戸口というのは、昔の満ち干だと海になるらしいのですが、今は宮島口をその部分とし、なんとか表参道的な意味を持たし、参道にしたい。世界遺産にふさわしいものにしたい、神さんの木戸口にしたいというのが強い思いでいて、今回、市のほうでみなとづくりをやられるということで非常に喜んで、一生懸命参加させていただいている途中です。

そのための地元としてできることとして、イベントを開催しようと。今年が9回目でしたけれども、地元でお砂焼き祭りという祭りを起こして、少しでもにぎやかづくりの下地をつくらうということでやらせていただきました。お砂焼きというのは御存じのようにお砂をいただいて、こっちで焼いている陶器でして、お砂焼き祭りは、それを冠にしたイベントです。

あれだけの世界遺産があり、外国の観光客もいっぱい来られるところですから、滞在してもらえるように、日本らしい雰囲気や木戸口らしい雰囲気を出し、活性化できるようやっていきたい。

JRをおりてから栈橋までを厳島公園線と言うのですが、もともとそこは宮島工業高校をつくるにあたっての土で作ったもので、今のお砂焼き祭りもそうなのですけれども、宮島工業高校さんと産学合体、タイアップして、授業でも取り入れていただき、モニュメントをつくって設置したり、地下道の中に写真や絵を配置したりと、宮工さんにいろいろなイベントにも積極的に参加してもらっています。

JRをおりたら宮島が見えて、そこ宮島口から宮島を感じてもらえるような、そんな風になるようやっていきたいのです。産学合体で取り組んでいきたいと思っているので、是非県のほうにも御協力を願いたいところです。以上です。

(知 事)

ありがとうございます。宮島口をおりたところの雰囲気づくりというのも大事で、あそこから宮島側の栈橋をおりて行く道と一体感ができると、すごくいいだろうと私も思います。今おっしゃったようなあそこの道をそういう雰囲気にしようと思ったら、各地権者さんあるいは、食べ物屋さんがそれぞれで分かれていらっしゃるから、それぞれ雰囲気を統一しようと思ったら、大改装など、いろいろなことをしなければいけないですね。

それは、地域としてはどのように考えていらっしゃいますか。

(木 谷)

今、市のほうにお願いしているのは、景観条例ですね。まず、景観条例で景観をよくしようと。それらしいものにするため、例えば真っ赤なものにしないとか、そういうハードの面では、景観条例で規制しようと、そういうことをお願いしているのです。それをまずやって、宮島口をおりた時点から歴史を感じるような、それを目標に頑張っていきたいと思っています。

神社仏閣はたくさんあります。今度は水族館もできますし、雰囲気づくりをやっていきたい。ずっと守っておられるところというのは、ルールをお持ちのような気がするのです。

(知 事)

そうですね。

(木 谷)

宮島口に商店街があって、それぞれのお店がある。それぞれのお店が続けていくためには、宮島は重要なものであるわけで、宮島の全体的な雰囲気は大切なものになるだろうと思うのです。ですから条例などで、色彩とか、歩道上とか道路でテント泊はしないとか、そういうような規制が必要になってくるのではと思うのです。

(知 事)

そうですね。

(木 谷)

親子連れで来てほしいわけですから、そうすると、食べ物の店ができる。家族で来れる。安心して来れる。ゆっくり回れる。朝晩の宮島はいいから泊まろうかと、そういうことにつながっていきたい。まちづくりの基礎は景観をよくすること。車をおりたら雰囲気が違うところを是非やっていきたいと思います。

(知 事)

なるほど。時間をかけながらやっていかれたいということですね。

(木 谷)

それと、やっぱりデザインが要ると思うのです。

(知 事)

そうですね。やっぱり基本のデザインをどのような雰囲気にするかというのは、もともとあったところではないだけに、そこを決めておかないと、ばらばらになってしまいますね。

(木 谷)

そうです。そうしないとうまくいかないのです。だから、こういうふうな姿図ができて、まだ私の思いだけなので、それを伝えてもらって、こういうふうにしていきたいと。それに向かって、何十年かかってもそっちに向いていこうという形がほしいのです。そうすると、安心して私も逝けますので。あとにつないでいってくれと、これから先の100年がいつまでも世界遺産であって、そのよさが残ってくれて、ますます歴史が重なっていいのではないかと思います。

(知 事)

そうですね。こういうことは、たくさん関係者がいると、まとめることは難しいのですが、本当にみんなが一致団結してやれば、それ自体が、そういう雰囲気がそのまちの財産になっていくわけです。みんなが協力しないとその財産はできません。そういうことは余計にお金がかかるものであり、自分の持っている家や店もあるのに、そういう雰囲気づくりのためにもうちょっと余計に出さなければいけない。それをみんながちょっとずつ出すことによって大きな財産になるのですけれども、それが追加の持ち出しとなると、やはり出したくないなというふうになりがちなので、宮島口においても是非まとまって、お客さんを受け入れる雰囲気、最近ではホスピタリティーという言い方をされますけれども、そういう雰囲気をみんなで作っていくと本当にいいところになっていくと思います。私もそういうふうになってほしいと思うのです。やっぱり宮島は広島顔ですし、世界の人に来て、宮島地域を楽しんでいますから、是非。

(木 谷)

まず一歩ですからね。宮島口から見ていただくということになりますから、そこの辺はいい雰囲気でお参りをしてもらいたいと。

(知 事)

そうですね。最初から最後までいい経験をしてもらうということですね。

(木 谷)

そうですね。そういう意味で、ディズニーランドには相変わらずお客さんが多いですが、

おりたときからそういう雰囲気, そういういい気持ちで帰っていただく。それがまたリピートにつながっていくのではないかと思います。

(知 事)

そうですね。おっしゃるとおり, 今, 観光は力を入れてやっていますし, 今度, 弥山の頂上の展望台を新しくしますので, またお客さんも増えると思います。是非よろしく願いします。

(木 谷)

お願いします。

(知 事)

ありがとうございました。

それでは, お待たせをいたしまして, 前田さん, よろしく願いいたします。

(前 田)

旧佐伯のほうから来ました廿日市市連合女性会の会長をしております。

女性連合会のほうは, 平成 15 年と平成 18 年の二度の合併で, 宮島, 大野, 廿日市, 佐伯, 吉和とが合併して, 今, 会員数が 1,550 名ぐらいおります。

主な事業は, トライアスロンに協力しまして, 廿日市でできたものを選手の皆さんに提供しようということで, まず大野はアサリが有名ですので, アサリ御飯をつかって, 佐伯のほうは角寿司というお寿司があります。岩国寿司に似た角寿司がありますので, それをつかって, あと吉和のアワビタケをパスタの中に入れて食べていただいたり, 選手の方に本当に喜んでいただいて, 本当にいい顔で次の日は頑張って走っていただいております。

また, 交通安全事業なのですが, 去年の夏には知事さんに暑い中, 県庁での出発式に出席していただいてありがとうございました。本当に夏, 暑くて大変だったのですが, 私は 3 日間広島県をずっとキャラバン隊で走ってまいりまして。

(知 事)

いらっしゃったのですか。

(前 田)

はい。

(知 事)

どうもありがとうございました。

(前 田)

暑い中をありがとうございました。

山口県のほうから引継ぎをしまして、愛媛県まで3日間かけてキャラバン隊で回らせていただいたのですが、交通安全は家庭からという自分たちの大きな思いがありまして、それをやってきたのですけれども、今年の仕分けに遭いまして、去年の12月末に、全交母、全国交通安全母の会というところが今年4月に一応解散という形になったのです。県の交通安全母の会はどうするかということで、今、検討中なのですが、交通事故というのは身近にたくさんあると思うのです。特に子どもたち、高齢者、そういった大切な命がなくなっていくという部分では、どうしてもなくしてはいけないという事業で、県のほうではやっていこうかなという方向でまたお願いにあがるかと思っておりますので、そのときにはよろしく願いいたします。

3世代交流事業で、一昨年は佐伯のほうで交通安全協会さんとか、老人クラブさんとか、地域の子どもたちとか行政の方と一緒に300人ほどで県警さんとか交通安全教室を開いたりしてやってきました。

また、個人的には人権擁護もやっております、人権って皆さんすごく固い、嫌だ、行きたくないというのがあるのですが、それをどういうふうにしたらもっと来ていただけるかなというのがあって、女性会と協力して、大国和江さんという県の委員さんがおられるのですが、その弁護士さんに講演とほっとコンサートというのを、これも佐伯のほうでさせていただきます。行政の方の協力も得まして150名ぐらい参加して、大盛況のうちに終わったのです。本当に人権とは堅苦しいものではない、身近なものだということも女性会と一緒に協力して皆さんに啓発していっているところです。

それと別に、あじさいという自分たちで劇をつくって、いろいろな福祉施設を訪問したりしているのですが、『真っ黒なお弁当』という平和劇とか、あとは民話です。これも佐伯から文化を発信したいという思いから、オリジナルなのですが、『岩倉昔ものがたり』という、これは津田のほうのお話を基につくったり、今つくっているのは玖島の民話で、藪入りをテーマにしたお話なのですが、それもオリジナルでつくって、佐伯から発信していこうという思いです。以上です。

(知 事)

ありがとうございます。交通安全には御協力ありがとうございます。

あと、トライアスロンにもいろいろかかわっていらっしゃって、宮島のトライアスロンは何年になるのですかね。

(前 田)

4回やりました。今年は5回目です。

(知 事)

これをやってみて、いかがですか。地域に与えた影響というのは、どんなことがありましたか。

(前 田)

食材を使って皆さんに提供するというのもあるのですが、当日、本当に沿道に出て、皆さんが本当に安全で安心して走られるようにしっかり応援したり、交通安全のほうでやったりして、本当に女性会を挙げて参加して、いい成果になっていると思います。本当に廿日市の大きなイベントではないですかね。

(知 事)

そうですね。そこに市民の方々が参加をされているところ、いろいろなボランティアだと思うのですが、それが非常に良かったということですか。

(前 田)

そうですね。廿日市の皆さんが本当に、最初は何で廿日市でこんなことをするのかという声が上がっていたのですが、やはり回を重ねるうちに、世界遺産があるこの宮島から吉和までを走っていくという大きな事業を世界に発信していきたいという会長の思いもありまして、本当に市民の皆さんが協力してやっている事業だと思います。

(知 事)

なるほど。トライアスロンの見ると、結構大変なので。

(前 田)

資金も大変ですし。

(知 事)

参加するアスリートが大変なのです。廿日市市の中で行われているので、吉和まで縦に上がっていくでしょう。すごい山を上がっていく、こんなトライアスロンはあまりないのではないかと。横に行って、廿日市市の外に出たら、多分もっと楽にできるのでしょうけれども、そこをあえて吉和まで直線的に上って行くというのが地域にとってはいいということなのではないでしょうか。

(前 田)

そうですね。本当に感動がもらえる事業だと思います。

(知 事)

分かりました。普通、トライアスロン等の競技大会をやると、人が来るじゃないですか。それが狙いだったりすることも多いわけですが、それによって地域の皆さんが、そこにいろいろな形で参画をして、そこでまた楽しんでもらうという、市民側にとっていいものになっている、大前くんもそうですけれども、トライアスロンをいろいろ手伝っていらっしゃる方がいて、そういう効果がある、というお話だと思います。ずっとこれが定着していくといいですね。

(前 田)

はい。

(知 事)

ありがとうございます。

自由討論

(知 事)

一通り終わりました。どうも皆さんありがとうございました。

あと 20 分ほどありますので、幾つかのお話をお伺いしたいと思うのですが、実は私も廿日市生まれなのです。地御前の総合病院で産まれたのですが、地御前に 4 歳まで住んでいました。その後は五日市に行って、南保育園に行ったのですが、今は大野、吉和、佐伯と合併をしまして、最近の新廿日市市はどうでしょうか。小さいころ、私は、五日市は廿日市と一緒にいるものだとずっと思っていたら、広島市と一緒にってしまったのですが、新廿日市市にはだんだん一体感が出てきていますでしょうか。いかがですか。どなたか御意見のある方は。川田さん。

(川 田)

合併が決まったころから、子どもたちは活動を始めていたのですが、当初、合併したら、自分たちの活動はもうできないのではないかと。それがとても残念なので、ビッグ・フィールドというのはビッグイコール大、フィールドイコール野、大野ということで、大野の名前を残したいということが初代会長の願いでビッグ・フィールド大野隊としたのですが、

それから3年ほどたって合併したときに、合併は自分たちの活動が終わるのではなくて、大きなフィールドで広がるのだよというふうに言っていただいて、子どもたちは、ああ、そういうことなんだということでも分かりまして、合併したら廿日市、吉和を含めてすごく大きな地域で、いろいろなお知恵をいただけるということが分かって、子どもたちは今、広がりの中で伸びやかに頑張れるし、今日も皆さんのお話を聞いていて、今も隣の岡本さんと一緒に、全部行事と一緒に組んでいけるねと。子どもたちを送り出して、すごい体験をさせていただくことで、子どもたちがもっと羽ばたけるというので思わず感動していたのですけれども、合併というのはそういうふうなところでお互いにつながっていく。そこにもってきて、大きな行事があることでさらに手をつなぎあっていけて、どこの地域も本当に皆さんすばらしい人という財産、人材がいてくださるので、すごいんだというのを改めて感じております。

(知 事)

合併のよさを実感できていると。

(川 田)

実感しております。もともと生まれはここではなくて、私は京都で、この大野とか廿日市で生活を始めたのですが、本当にここは人が財産だと。広島県は人が優しいと私は自信を持って申し上げられると思います。

(知 事)

そうですね。ありがとうございます。合併をして子どもたちの活動の輪が広がったと。あるいは、参加者も広域になってきてよかったという、そういう合併の効果がありましたということでしたね。

ほかにどなたか、御意見ございますでしょうか。木谷さん、お願いいたします。

(木 谷)

私はずっと宮島口で、生まれ育って、先祖は宮島なのですが、明治のころ宮島から出てきたみたいなのですが、先ほどもありましたが、宮島の人だんだん少なくなってきて、先ほどの医療とか、水もそうだったのですが、みんな大野からいっていたのです。そういう中で、今度合併をして、都市計画税ができたとか、水道料金が上がったとか、大野が一個もないじゃないかとか、いろいろな意見があったのですが、私はまず一番に、例えば救急患者が出て、救急車の手配から、患者さんが船で待っていると、私は宮島口ですのでそういうのを目の当たりで見ているので、それとか、火事があるので、消防が廿日市になってからたくさんいかれるので、それとか、イベントがちゃんとできる

とか、そういうことで宮島だけ、あるいは大野ではできなかったことが、いっぱい知恵も借りれるようになりましたし、そういう意味ではとてもよかったのではないかと考えています。

一番は今度の埋め立てですね。宮島口みなとづくりというのが前に出ましたので、子どもときからのずっとの思いがやっと実現して、非常にありがたいなと思っています。

(知 事)

ありがとうございます。いろいろな行政の資源が共有できるということで、サービスがよくなったということですね。地理的にも非常に近いですからね。そういう面もあるのかなと思います。

ほかは、どなたかございますか。岡本さん。

(岡 本)

せっかくの機会なので、お願いというか、私の子育て支援をしている立場から気になっていることを伝えたいと思います。

宮島からお母さん自身が子育ての間も自分の身に付けたいこととか、資格をとりたいたとか、そういう思いで習いものとか、そういう活動をされているお母さんがいらっしゃいます。宮島から来られるお母さんがいらっしゃるのですけれども、車に1歳そこそこの赤ちゃんを乗せて、フェリーで来られるのです。フェリーで来られて、それから一時預かりに預けて、それからアルパークとかでの習いものを習われようとする、本当に1万円近くのお金が、1回のフェリーの代金と一時預かりと御自身の月謝と、というふうにして、それでも習いたい、頑張りたい。今の時間、自力をつけておきたいと思われてされているお母さんがいらっしゃるのです。そういうときに何か手伝えることはないだろうか本当に思うのです。そういうのを行政の中からバックアップできるとか、自分でやろうと思わないとできるような活動ではないのですけれども、そういうことがお手伝いできないかと思うのです。

(知 事)

なるほど。県というよりも、市町も含めて、そういった勉強をしたりするというのは、場合によっては補助があったりすることもありますし、中味によると思うのですけれども。

(岡 本)

そうですね。

(知 事)

そういう前向きな皆さんの活動というのは、できるだけ後押ししたいということですね。

(岡 本)

島にいらっしゃるから、普通だったら車だけで済むところが、フェリー代金がかかったり、そんな中でも30代のお母さんが今の子育てで社会に直接は貢献できない時期だけど、自分で今、身に付けたいことができる。そういう空間づくりがしたいというのが今、私のやっていることですけれども、その中で、島にいるからたくさん負担がかかってしまうというのはちょっとかわいそうだなと思ってみているのですけれども。

(知 事)

そうですね。そこはいろいろありまして、島じゃなくても、高速道路を使わなければいけないとか、そういう方もありますし、それはいろいろな条件があるので。

(岡 本)

宮島は過疎になっているという情報もありますし、小さいお子さんがいらっしゃって、女の子なのですけれども、幼稚園に行かそうか、地元の保育園に行かそうか、でも、保育園には子どもたちがいないし、女の子だから今から出ていくだろうしとか、切実な悩みが具体的にあるというのも現実なのです。どんなふうにしていったら本当にいいのか、みんな考えていくことなのではないかと思います。

(知 事)

ありがとうございます。島の暮らしをどういうふうにサポートしたらいいかというお話だったと思います。

合併の件について、ほかに御意見はよろしいですか。ありがとうございました。

実は合併のこともいろいろな地域でお伺いしておりまして、地域によっては、中心と周辺というか、本当はそんなにないのだけど、どうしてもそういう差を感じて寂しくなったという御意見も出たり、窓口が遠くなったので不便になったという御意見もあるのですけれども、廿日市市の場合ほうまくいっている、一体感が出ているような印象をいただきました。ありがとうございます。

次にもう一つお伺いしたいのですけれども、川田さんが先ほど人が財産だということをおっしゃっていたのですけれども、確かに今日も皆さんのかかわっておられることをお伺いすると、非常に人のつながりだとか、人を思いやる、そういった活動が多いような気がします。それは廿日市の特徴なのでしょう。どう思われますか。特に廿日市の外から来られた方はどう思われますか。外から来られたのは、川田さん、野村さんもそうですよね。尾形さん、生川さん、前田さんもそうですか。尾形さんはどう思われますか。五日市と廿

日市で近いですけれども。

(尾 形)

廿日市全体となると僕は分かりませんが、宮島に関して言えば、今の広島市内の状況、人づき合いとは全く違う。本当に昭和の初期、中期あたりの深い近所づき合いがまだ残ってしまっていて、隣の家が静かなので、どうしたんと見に行ったら、おばあちゃんがしんどいんじやと寝とって、隣の方が、先生、誰々さんが調子が悪いみたいだから診てあげてくれんということがあったり、普通、広島市内でそういうことはないですね。

(知 事)

五日市でもないですね。

(尾 形)

僕が行って非常に驚いたのはそういったことです。

隣の人とか近所の人が、誰々さんにこうしてとか、まずなかったと思うのです。ないというか、なくなっていると思うのですけれども、非常に根強く残ってしまっていて、いい意味では僕の仕事上でも役に立っていますし、古きよきというのが残っているところだと思います。

(知 事)

なるほどね。ありがとうございます。宮島は、僕も小さいころから行っていきますけれども、昔からにぎやかなところで、確かに人口は減ってはいるけれども、どちらかというところ、そういう関係はむしろ薄いほうではないかというイメージがありましたけれども、実際にはそうではなくて、やっぱりとても強いつながりが残っているということなのですね。

(尾 形)

かなり高齢化が進んでしまっていて、多くの方が 70 代以上の方で、生まれも育ちも宮島ということで、例えば小学校の同級生、中学校の同級生と、80 歳、90 歳の方がそういう話をされるので。

(知 事)

ずっと何十年も一緒ですね。

(尾 形)

特殊というか、そういう深いつながりの中で暮らしてこられたのだなと思うことがあります

ます。それ以下の年代になってくると過疎化が進んでいまして、必ずしもそうでもない方もおられますけれども。

(知 事)

分かりました。ありがとうございます。

ほかの方、今のテーマで。前田さん、お願いします。

(前 田)

私も大阪のほうから 33 年前に来たのですけれども、川田さんと同じような思いで、本当に都会ではまず体験できないこと、佐伯のほうでいい思いをさせてもらったことがあります。私の子どもが本当に赤ちゃんのころ、乳児健診のときに旧佐伯町の役場へ、まだバスの便もあまりなく、車の運転もできるわけではない。そんなときに、バスの時間にあわせて行くには、窓口があいていない時間、12 時から普通閉まりますね。大阪のほうでは 12 時から 1 時までには絶対にやってくれないというのが、いいですよと言って 20 分ぐらい待っていてくださっていて、それを含めて、そういったまちならではの温かさというのをすごく感じます。

何事も、いろいろな行事をするにしても、佐伯だからできる。行政と一緒にあって、住民と一緒に何でもできるというのが、今もやってきて、すごくいいまちだなと思います。

(知 事)

ありがとうございます。思いやりを持って接してもらえるとということですかね。

野村さん、どうですか。野村さんも五日市だから近いのですけれども、ちなみに五日市のどこですか。

(野 村)

佐伯区の美の里というところで、廿日市高校のすぐそばで生まれ育ったのですけれども。

(知 事)

楽々園小、南小ですか。

(野 村)

南小です。

(知 事)

同じですね。

(野 村)

当時 2,000 人ぐらい中の 1 人だったのですけれども、今、僕は外から宮島に入って、尾形先生がおっしゃるように、本当にびっくりするようなことも多いですけれども、つい先日も赤ちゃんを連れてお母さんが、雨が急に降りだして、ベビーカーを商店に置いてきていて、ちょっと赤ちゃん、抱いていてくれるって言って、そのままどこかに行ってしまうって、こういうのは多分ないだろうなど。

(知 事)

ないでしょうね。

(野 村)

パン屋で優しいイメージがあるので信じてくれたかもしれないですけれども、そういうのから、さっきおばあちゃんの小銭の話もしましたけれども、おつりがないと言ったら、小銭を、1 円、5 円ためているのを持ってきてくれたり、実際、お年寄りだから 1 円とか 5 円はつまめないのです。だから、おつりは要らないという方もたくさんいらっしゃるのです。そういうのは日々触れていると、僕もしばらく東京にいたもので、絶対にあり得ないことでしたから、宮島はもちろんいい意味でも悪い意味でも田舎なのですけれども、そういういい面はもっと伝えていってもいいのではないかと思います。ここに御参加の皆さんは確かにそういう人を通じたいろいろな活動をされていらっしゃるって、東京の話ではないですけれども、五日市であるとか、そういうことになかなか触れあう機会がない。僕なんかパン屋で朝から晩まで忙しいので、こういうことを見せてあげてもいいよと言っても、なかなか言い出せない。先日、たまたま小学生の子どもがいるので、先生がよかったら将来設計科の授業が宮島にはあるので、子どもたちを連れて勉強させてもらってもいいですかと、申し出があったときには、そういう今の僕がお話ししたようなことをお伝えできるのですけれども、なかなかそういうきっかけは僕自身から言い出せないので、廿日市市でもいいですけれども、そういう日ごろの活動とかを社会見学のような、そんな堅苦しいものでなくても、やると、いろいろな生き方があるんだとか、就職にしても、何かの本に載っているのだけが就職先ではなくて、林業があり、農業があり、いろいろところでいろいろな価値観を持って仕事ができるというのをお伝えできるのではないかと。その窓口を是非つくっていただきたいと考えます。以上です。

(知 事)

ありがとうございます。中島さん、富野さんはどうですか。

(中 島)

私は本当に全く縁もゆかりもない広島県の吉和というところに引っ越してきて、3年間続いたのは、本当に周りの人のおかげだというのがあって、冬はとにかく雪かきが毎日大変なのですけれども。

(知 事)

今年は特に多いですね。

(中 島)

多いですね。今朝も大変だったのですけれども、大体近所の人が、朝、私がスコップを持っていたら、どこから見ているか分からないですけれども、常に集まってきて、手伝ってくださって、私が帰ってくる時間ぐらいには、きれいに雪かきをしてくださって、車が入れるようにしてくださっていて、本当にありがたいのです。年中を通してお野菜とかお魚とか、いろいろなものも届けてくださいます。子どもたちが一番私は驚いたのですけれども、子どもたちにしてみれば全く知らない人だと思ふのです。でも、小学生が朝、「おはようございます」と必ず声をかけてくれて、夕方には「ただいま帰りました」と声をかけてくれて、それがすごくうれしいのです。将来もしかしたら吉和を出ていってしまう子どもたちかもしれないですけれども、この気持ちは大切にしていきたいし、先ほど林業で子どもたちを呼んでみたいという話をしましたけれども、植え付けとかを体験してもらって、例えば50年後に、その子たちももう大人になっているところに、あのとき植えた木を今から切らせてもらいますよとか、それがまたきっかけで吉和に帰ってきてくれるとか、そういうことがつながれば、そういうことにかかわれば幸せだなというふうに思います。

(知 事)

子どもたちも山にね。

(川 田)

こんなに素晴らしいことはございませんので、是非大野の子どもたちも参加させていただけたらと。

(知 事)

みんな喜ぶと思いますよ。

富野さん、どうですか。

(富 野)

自分も広島市の可部から吉和に移ったのですけれども、移った当初は分からないことだらけで、でも、地域の人がいろいろ面倒を見てくれて、仕事の面とかでもアドバイスしてくれたり、住みやすいところだなと。

廿日市市は縦長なので。

(知 事)

海から山まで、本当にそうですよね。

(富 野)

農業でも廿日市市のブランドができれば、季節ごとの、標高も違うし、そういうのは有利だなと思っています。

(知 事)

多様なものが一つにぎゅっとまとまっていますね。

(富 野)

はい。

(知 事)

さっきも言ったように漁業もありますからね。分かりました。ありがとうございます。大前くんも、優しい人がたくさんいるということだね。

(大 前)

はい。

(知 事)

ということで、広島に残って、地元に残ってもらうということで、よろしく願います。

閉 会

(知 事)

それでは、時間も過ぎてしまいましたので、これで終了とさせていただきます。

改めまして、今日は長いお時間、ありがとうございました。とてもいいお話をお伺いできたと思います。宝さがしという名前が付いているので、皆さん、ときどき勘違いをされて、本当に宝を探しているのではないかと。実は、宝だけではなくて、いろいろな課題だとか、地域のいいところ、悪いところ、それらを全部行政としては受けとめていかなければいけないと思っているのです。今日は本当にたくさんいいお話をさせていただいて、本当によかったと思います。

また、傍聴の皆様も、長いお時間、本当にありがとうございました。傍聴が一番大変ではないかと思うのですけれども、しゃべる我々はまだいいのですけれども、ずっとお聞きになるのはおしりも痛くなるし、大変だったのではないかと思います。本当に長いお時間、ありがとうございました。

最初に申し上げましたように、一つ一つの課題をこの会で考えていくというよりは、県政の基礎として、いろいろなことの総体としてとらえていきたいと思っております。また、県政については、これから県民が主役であるということで進めていきたいと思っております。つまり、実際に広島県を変える力、広島県を活性化していく力を持っているのは県民の皆様であるということです。行政が経済活動をするわけでもありませんし、例えば福祉でも、実際にその福祉の事業をするわけではありませんし、教育もするわけではなし。それを実際にやられるのは、地域の企業さんだったり、あるいは、福祉法人だったり、まちのパン屋さんだったり、あるいは農家の方だったりするので、それを我々はできるだけ活発にできるようにいろいろなお手伝いをしたいと思っております。

そういうことで、引き続き御協力をお願いしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。今日は本当にありがとうございました。